

『西鶴諸国はなし』と謡曲『安宅』

——「十二人の俄坊主」「姿の飛のり物」への利用——

寺 敬 子

はじめに

有働裕氏は『西鶴諸国はなし』の文体を、「一章を構成する要素と要素との間に、読者はしばしば深い断絶を感じさせられる」と評された⁽¹⁾。本論で取り上げる巻二の二「十二人の俄坊主」もまた、一話の中にそうした「断絶」を感じさせる話のひとつである。まずは内容を確認しておきたい。同話の梗概は以下の通りである。

ある殿様が加太の浦に船を出し、遊興に興じていた。家臣たちは浪に浮かび水練の技を見せる。次に、船端から突き落とされながら、見事な居合の技を見せた「関口某」の描写が挟まれる。関口の妙技に上機嫌な殿様は、船で阿波島の神域へと立ち入る。そこへ大きな蟒が現れ、人々を驚かす。殿様はこの蟒にひとり立ち向かい、ついにこれを撃退する。ところが、住処へ戻ろうとする蟒は家臣らの乗る小早船を転覆させ、乗っていた十二人全てを飲み込んでしまう。十二人は幸いにも逃れることが出来たが、汀に流れ着いた彼らを見ると全員ともに髪が抜け、「俄坊主」の姿

になっていた。

本話は大まかに四つの場面に分けることができるだろう。一つ目に、家臣たちによる遊興と水芸の描写。二に柔術の達人関口某の逸話。三に殿様が蟒を退治する武勇譚。四つ目に、蟒に飲まれた家臣十二人が坊主頭になる一話の下の部分である。

これらそれぞれの要素については、先学によってその素材が明らかにされている。「殿様」のモデルは紀州藩主徳川頼宣公であるとされ、家臣に水芸を行わせたことは『祖父外記』に同様の記述が見られ⁽²⁾、関口某の居合の逸話は『雪窓夜話』巻九「竹村甚左衛門ガ咄」に同じ系統の話があるとの指摘がある⁽³⁾。また頼宣公が蟒に襲われる怪異部分⁽⁴⁾は『武野燭談』巻七⁽⁴⁾や『祖父外記』巻一の二「南竜公言行録」の豪勇譚と同一「友ヶ島遊覧」の雷の話⁽⁵⁾、『怪談信筆』第十七話「淡島大神現形」⁽⁶⁾に類話があるとされる。また蛇に吞まれた者の頭髮が抜けることは『醍醐随筆』上⁽⁷⁾と『宿直草』巻三の七「蛇の分食といふ人の事」⁽⁸⁾、『因果物語』（片假名本中ノ一五）⁽⁹⁾に同様の話が見られる。これら先行研究により、西鶴がいかなる素材を用いて一話を組み立てたのかという点はすでに明らかにされているわけである。

しかし、このように明確な素材が判明していても、なお本話には釈然としない点が残る。それは、なぜこれらの要素が一話にまとめられたのかという創作上の経緯である。取り上げられた素材一つ一つを見れば、それらは確かに「紀州」「蛇」といったキーワードでつながっているかに見える。しかし素材同士の接合面はいずれも粗雑であり、相互のつながりは見られない。また章題を「十二人の俄坊主」とし、後半の怪異場面を一話の主眼としているのかと思いきや、目録における小見出しは前半部分を集約した「遊興」となっているなど、いずれのエピソードにもさして軽

重がなく、物語の主題が見えづらいのである。それを作家西鶴の未熟さに要因付けることも可能であろう。本話は一話としてのまとまりを欠いており、要素が並列されただけという失敗作の印象を否めない。

しかし、この一見断絶を感じさせる四つの要素が一話に収斂されるには、何らかの接点があるはずである。各モチーフの関連性が表面上希薄であればあるほど、それらを結び付けるためにはむしろ確固たる連想の核が存在するのではないか。結論から言えば、本稿はこの要素同士を結び付けたものが、謡曲の『安宅』ではないかということを述べようとしている。

一、イメージの基盤としての謡曲『安宅』

『安宅』は義経・弁慶一行の逃避行を素材とした謡曲である。梗概は以下の通りである。

兄頼朝に追われる義経は、「作り山伏」に身をやつし、弁慶以下腹心の家臣を引き連れて総勢十二人で奥州を目指す。途中、加賀の安宅関にて関守富樫に咎められた一行は、自らを東大寺再建のための勧進聖だと偽る。なおも疑う富樫の前で弁慶は偽の勧進帳を読み上げ、さらに主君の義経を打ち据えて富樫を欺く。許されて関を通った一行を富樫が酒宴に誘う。弁慶は延年の舞を披露して暇を乞い、一行と共に奥州へと落ち延びて行く。

こうしてあらすじを攫っただけでも、「十二人」「作り山伏」といった、「十二人の俄坊主」を思わせるキーワードが見出せる。本話の結び「十二人つくり坊主となれり」が、『安宅』冒頭の詞章「十二人の作り山伏となつて」から取られていることは、表現の一致から明らかであるように思う。このことは乾裕幸氏の論考にすでに指摘がある⁽¹⁰⁾。

「十二」という数字が西鶴の中でいかなる連想に繋がっていたかということは、次の『物種集』の付合に明らかである。

うみのまま育つる子共十二人

もて遊びにはつくり山ふし 井原西鶴（傍線部は以下全て寺）

『西鶴連句注釈』はこの句意を「前句）生まれたのを全部育てて子供が十二人もいることだ。（付句）その子供たちには、源義経都落ちの時の十二人の偽山伏にちなんで、山伏の人形を与えて遊ばせるなあ。」⁽¹¹⁾とする。西鶴にとつて、「十二人」という数字は義経弁慶以下の十二人の主従を連想させるものであった。

また『安宅』の作り山伏、つまりは俄に仏者となつた十二人は、章題の「俄坊主」を連想させる。次のような例がある。

奉加帳一昏半銭すゝめ得て

坊主あたまのさかやき跡あり 『信徳十百韻』⁽¹²⁾

まづ弁慶は坊主也けり

高／＼に読上たりや十馬切 中林素玄『二葉集』⁽¹³⁾

これらの句を見るに、山伏に扮した弁慶は、その場しのぎに頭を剃りこぼっていたというイメージが普及していたのであろうか。おそらく西鶴はこのイメージに触発され、一話の締めくくりに全員が坊主になるという下げを用意した

と思われる。

さらに、「蟒」の怪異もまた、『安宅』よりの発想ではなかっただろうか。『安宅』のキリは、

笈をおつ取り、肩に打ちかけ、虎の尾を踏み毒蛇の口を、遁れたる心地して、陸奥の国へぞ、下りける。¹⁴⁾

と締めくくられる。関守富樫との息詰まるやりとりを経てついに安宅の関を脱した安堵感が「毒蛇の口を遁れた」と喩えられているのであるが、「十二人の俄坊主」の下げである、十二人の人間が蟒に飲まれるものの危うく窮地を脱するという流れは、この『安宅』の一節に着想を得ていたと思われるのである。

また本話前半の遊興部分にも、『安宅』との関連を見出すことができる。『安宅』では、弁慶の機転によって関を越えた一行は、追っ付けやってきた富樫に酒宴に誘われ、その申し出を受け入れる。弁慶は酒に酔ったさまで勇壮な延年の舞を披露する。つまりは「遊興」の場面が繰り広げられるのである。「十二人の俄坊主」前半の遊興部分は、この箇所から連想することが可能であろう。そして『安宅』では舞い終えた弁慶が、

日は照るとも。絶えずとうたり。絶えずとうたりとくく立てや。手束弓の。心ゆるすな。関守の人々。暇申してさらばよとて。

とその場を辞すが、ここに登場する「手束弓」は、謡曲『雲雀山』の「麻裳よい紀の関守が手束弓」といった詞章が表すように、紀伊と結び付けられる語であることも付け加えておきたい。

以上のことを整理すれば、本話の「遊興―蟒―十二人の俄坊主」という大まかな骨子は、謡曲『安宅』の中に見出

することができるといふことになる。また話の大枠だけではなく、細かな描写や設定にも『安宅』の影響は色濃く見える。「十二人の俄坊主」冒頭の遊興の場面に着目してみたい。ここでは家臣らによる見事な水芸の様が描写されている。以下にその様子を引用する。

折ふし、夏海の静かに、加太の浦あそびとて、御船を寄せられしに、御台所船より御膳の通ひ、浪の上を行くに、腰より下ばかりを濡らして、自由する事、畳の上に変はらずして、月代をする人もあれば、中将棋をさすもあり。鸚鵡盆を交し、曲呑みをするものをかし。曲舞にのせて小鼓を打ち、または瓜の曲剥き、これさへ奇妙に眺めしに、四五人して、すぐり藁を何程か手毎に抱へて、海中に入りて、出ぬ事二時に余りて、二王の形を作りて、手足の力身までを細縄がらみの細工、これぞ仏師も及びがたし。⁽¹⁵⁾

これら描写のうち、御膳の通いや瓜の曲剥きは、通常の水練の技としてさもありなんといったものである。水練の書である『踏水訣』にも、同様の技が紹介されていることは、既に指摘のあるところである⁽¹⁶⁾。これに対して、後半部分の「わら細工で二王を作る」といった行為は、いかにも滑稽であり西鶴の創作らしい。この滑稽部分を挿入した契機はなんであったか。ここで思い出されるのが、『安宅』における義経主従一行が、東大寺の勧進山伏に身をやつしていたという事実である。安宅の関において、関守富樫に疑いをかけられた義経一行は、

いかに山伏たち、これは関にて候。シテ 承り候。これは南都東大寺建立の為に、国国へ客僧を遣わされ候。

と身を騙る。東大寺には南大門の金剛力士像（二王像）が有名である。これが「藁細工で二王を作る」滑稽部分の着想の元となっていたと考えることは出来ないだろうか。

さらに、曲呑みの際に「鸚鵡盃」を使用するという箇所も、『安宅』の、

おもしろや。山水に。おもしろや山水に。盃を浮べては。流に引かゝる曲水の。手まづさへぎる袖ふれていざや舞を舞はうよ。

との箇所から連想することが出来るだろう。「曲水」は宮中で行われた曲水の宴のことであるが、曲水の宴には鸚鵡貝で作られた盃が用いられたと言う。曲呑みに用いる盃にわざわざ「鸚鵡盃」を指定したことの裏には、この一節の影響があるかと考えられる。また「月代をする」の部分は、右に述べた弁慶一行の「坊主」のイメージに関連しているとも思われる。つまりは一話の各所に、『安宅』から連想される語が散見できるのである。

二、他作品における『安宅』の利用

西鶴による『安宅』の利用は本作に留まらない。

『諸国はなし』刊行の同年（貞享二年）二の替に初上演と推定される西鶴作の浄瑠璃『凱陣八島』で、同じく義経の北陸下りが題材とされている。つまり『諸国はなし』執筆と同時期に西鶴がこの素材に強い関心を持ち、親昵していたということになる。『凱陣八島』においても、「十二人のつくり山伏となり」「おの／＼打連れ通らるゝ虎の尾を踏み毒蛇の口、危かりける次第なり」「よしつね道行」といった『安宅』の詞章を踏まえた表現が見られる。

なお、西鶴がこの『凱陣八島』に『安宅』を素材としたことは、「前から始まった公慶の勧進を当て込んで『安宅』の勧進帳を取り入れ」たことが一因であったとされる¹⁰⁾。永禄十年の戦乱によって焼失したままであった東大寺

の大仏は、貞享元（一六八四）年に幕府より勧進の許可が下り、再建事業が始まっていた（『国史大辞典』『東大寺』条に拠る）。『諸国はなし』においても、巻一ノ一「公事は破らずに勝つ」では東大寺の太鼓が題材となっており、この勧進事業に触発された設定であることが指摘されている⁽¹⁸⁾。これら背景を念頭に入れば、『諸国はなし』に東大寺勧進を素材とした『安宅』が利用されることも極めて自然な流れであると言えるだろう。

また『武道伝来記』【貞享四（二六八七）年刊】巻三の三「大蛇も世に有人が見た様」にも『安宅』の利用は見られる。同話は、伊世宇和島藩の武家同士が名誉をかけた果たし合いを行う話であるが、その発端は船遊山の最中に竜が出現するという怪異事件であった。この竜に対して勇士石目弾左衛門が敢然と立ち向かい、睨みつけることで退散させた、という出来事を導入として、後の騒動へと話が繋がって行くのである。右の導入部分は、船での遊興中に蛇⁽¹⁹⁾が出現し、一人の勇者がそれを撃退するという構成が「十二人の俄坊主」と一致している。谷脇理史氏は同話の「盃流しの一曲を興じてうたふ所に」という一節が、『安宅』の「おもしろや山水に、盃を浮かべては、流に引かる、曲水の」以下の場面を背景とするとされる。同時に、それに先立つての箇所には、謡曲『船弁慶』の一節が引かれている⁽²⁰⁾。るとも指摘されている⁽²⁰⁾。

この例に倣って『安宅』から『船弁慶』への連想ということを考えた場合、「十二人の俄坊主」の発想の経緯はさらに明らかになるだろう。例えば遊興の場が「船」であることはもちろん、藩士が海上に浮かぶ水芸の場面は、『船弁慶』における「あら不思議や海上を見れば。西国にて亡びし平家の一門。おのゝ浮み出でたるぞや」「主上を始め奉り一門の月卿雲霞の如く。波に浮びて見えたるぞや」⁽²¹⁾といった場面から着想を得たかと想像できる。つまり西鶴の中で、『安宅』は「遊興」「蛇」「坊主」や、さらにそこから敷衍して引きだされる『船弁慶』の「船」「水に浮かぶ人」といったイメージと結び付けられていたということになる。そしてこれらのイメージが、「十二人の俄坊主」

の一話を構成する要素となっているのである。このことを本章の結論としたい。そして『諸国はなし』における『安宅』の利用は、この一話にとどまらないようだ。

三、前話からの連続性

「十二人の俄坊主」の前話である巻二の一「姿の飛のり物」は、乗物にのって西国街道を移動する怪しい美女の怪異譚である。最初に女が目撃されるのは「呉服の宮山」の「絹掛け松」の下であった。供も連れず打ち捨てられた女乗物を見て、近所の人々は中を覗き込む。しかし何の反応もせずおそろしい眼付で座っている女に恐れを覚え、心を残しながらも立ち去って行く。そんな冒頭でこの一編は始まる。

本話は類話として『義残後覚』【文禄五（一五九六）年成】巻七の十「女房、手の出世に京へ上る事」があることを高田衛氏が指摘されている²²⁾。同話は近江草津の宿に乗物で現れた美しい上臈が、ある時忽然と消えるという奇談であり、最終的にこの上臈が狸の化けたものであることが明らかにされる。ただし『義残後覚』の舞台は近江草津であるのに対し、「姿の飛のり物」で女乗物が移動するのは西国街道沿いの土地である。つまり、「姿の飛のり物」の舞台設定は西鶴独自のものであり、そこには何らかの意図が働いているということであろう。

さて、話の出発地となった「呉服の宮山」とは、大阪府池田市に存する「呉服神社」近辺の五月山を指すかと思われる。「呉服神社」は、日本に職工の技を伝えたと伝承される渡来人「呉服」（くれはとり）を祀る神社であるが、この呉服には「綾織（あやはとり）」という名の姉妹が居り、同じく池田市内の「伊居太神社」に祀られている。二人の姉妹が唐より渡来して、日本に技術を伝えるまでのいきさつは謡曲『呉服』の素材となっており、広く知られるところであった。「くれはとり」「あやはとり」の名は対を為すものとして認知されていたようで、そのことは例えば、

『西鶴諸国はなし』と謡曲『安宅』

あやしやさてもたれにかりぎぬ

この小袖人のかたよりくれはとり 『犬筑波集』^四

といった付合によく表れている。連句においては、「くれはとり」は「あやはとり」との連想から、「あやし」や「あやめ」といった語を導き出す役割として用いられることが多いようだ。そしてこの「くれはとり—あやし」という修辭は、謡曲『安宅』の中にも見出すことが出来る。

人の情の盃に。うけて心を取らんとや。これにつきてもなほ／＼人に。心なくれそ呉織。地「怪しめらるな面々と。」

右は弁慶が朋輩に対して、安宅の関守富樫に対し心を許さぬように、と述べる箇所であるが、たくみに「くれはとり」「あやはとり」の名を織り込みながら、人々に注意を喚起している。

さて、後続話の「十二人の俄坊主」に『安宅』が利用されていることを前提とすれば、この「呉服の宮山」という舞台設定をした際、西鶴の脳裏にはすでにこの『安宅』の一節が浮かんでいた可能性がある。そのことは、前話「狐四天王」（巻一の七）との関わりからも想像することが出来る。「狐四天王」の結末では、主人公の門兵衛とその親族は、狐殺しの復讐を受け「俄坊主」にされる。つまり『安宅』のモチーフはすでに巻一において登場しているのである。「姿の飛のり物」へ前話からの俄坊主のイメージが引き継がれていることは、美女の傍には不似合いな「刺刀かたし見えける」との描写からも窺えるだろう。つまり同話の冒頭から、西鶴の脳裏には『安宅』の存在があったということになる。「呉服の宮山」という舞台設定も『安宅』からの連想の元に行ったのであり、その裏には、女乗物が「心なくれそ呉織」と、心を許してはいけないものであり、「怪しめらるな」と警戒するべき存在であることが暗示

されている。

また、乗物の女は「絹掛松」の傍に居たとされる。このことは、安宅の名所「根上がりの松」を思い起こさせる。安宅ものの舞曲「富樫」には、根上松のことが詳述されている。また、「富樫」において、弁慶一行に安宅の関の取り締まりを教えたのは「松の葉寄せてぞゐたりける」「童四五人」であつたとされている。そして「姿の飛のり物」で、怪しい女乗物を最初に発見し人々に伝えたのは「柴荊る童」であつた。このような類似からも、西鶴の脳裏には安宅の関における義経一行の騒動が意識されていたことが窺えるのである。

そして『安宅』は、冒頭の設定のみでなく、その後の展開にも関わっているようだ。呉服の宮山で発見された女乗物は、翌日には西国街道の宿場瀬川でその姿を発見される。伴も連れぬ一人旅の美女に目をつけたのは、土地の荒っぽい馬方達であつた。本文はその様を次のように描写する。

所の馬方、この女郎を忍び行きて、浮世の事どもを語りつくして、「情」といへど、取りあへずましませば、荒男の無理に、手を差してなやめる時、左右へ蛇の頭を出し、男どもに食ひ付きて、身を痛める事、大かたならず。何れも眼くらみ、氣を失ひ、命を不思議にのがれ、その年中は難病にあへり。

女に言い寄り「情」を求めた馬方は蛇によつて散々な目にあわされる。ここで思い出されるのが、『安宅』の

人の情の盃に。うけて心を取らんとや

という一節である。少し唐突な印象を与える馬方達の口説き文句「情」の一語は、この箇所から取られたものではな

かったか。さらに『安宅』の結末は、先に引用したように「笈をおつ取り、肩に打ちかけ、虎の尾を踏み毒蛇の口を、遁れたる心地して、陸奥の国へぞ、下りける。」との一節で締めくくられる。つまり、関守富樫の「情」の盃に絆されなかつた義経一行は無事に毒蛇の口を逃れることが出来たが、美女に「情」を求めて「心をとら」れた馬方達では、「毒蛇の口をのがれ」ることが出来ずに、身を痛める結果となつたのである。目録での本話の小見出しは「因果」である。義経一行と馬方達が、それぞれ「因」に応じた「果」を受けた、ことを指していると読むのは穿ち過ぎであろうか。「命を不思議にのがれ」との表現もまた、『安宅』の「毒蛇の口を、のがれたる心地して」との詞章と通うものがあるだろう。

「飛のり物」の道行はなおも続く。女を乗せた駕籠は徐々に西国街道を東へと進み、「芥川」、「松の尾の神前」、「丹波の山近く」と、目撃場所を転々と変えていく。また場所だけではなく、その姿をも「美しき禿」「八十余歳の翁」「顔二つ」「目鼻のない姥」に次々と変え、これを恐れた人々が夜の外出を控えたため「世のさまたげ」になつたらしい。さらには、この事を知らない旅人が夜道を通ると、突然乗物の棒が肩に乗って離れなくなる、という怪異が出現した。不思議なことに重さはないが、一町も進むころには急にくたびれて足も立たなくなつたという。こんな「陸縄手の飛び乗物」の怪異が慶安年中までは続いたが、いつとなく途絶えて「橋本・狐川のわたりに、みなれぬ玉火」だけが残った。一話はそんな結末に終わる。

さて、結末の場として登場する地名「狐川」は、薩摩守平忠度を連想させる。歌人平忠度は、平家都落ちの最中に藤原俊成に自作の歌を託し、勅撰和歌集への入歌を願う。謡曲『忠度』は、その経緯を、

年は寿永の秋の頃。都を出でし時なれば。さも忙かしかりし身の。く。心の花か蘭菊の。狐川より引き返し。俊成の家に

行き歌の望を嘆きしに。望足りぬれば。又・弓箭にたづさはりて。西海の波の上。暫しと頼む須磨の浦。源氏の住み所。平家の為はよしなしと知らざりけるぞはかなき。²⁴⁾

とする。『西鶴名残の友』【元禄十二（一六九九）年刊】卷二の一「昔をたずねて小皿」には、「むかしの忠度は、狐川よりひつ帰し、定家の許にたばこ入れを忘れて、見えぬ事をなげかれし」²⁵⁾と、右の引用箇所を踏まえた部分があるから、西鶴にとつても狐川という地名は忠度を喚起させるものであったのだらう。そして「忠度」の音が「ただ乗り」を響かせることは、狂言『薩摩守』を引き合いに出すまでもない。怪しい女は旅人に乗物を担がせ、「ただ乗り」を繰り返していたのである。

以上のことをまとめたい。話の（同時にのり物の）出発点となった「呉服」の地名が暗示する通り、のり物の美女は始めから「あやし」きもの、人々に注意を喚起させるべき存在として登場した。そして旅人の肩に「ただ乗り」する悪戯を繰り返し、往來の妨げとなる。つまり一貫して、女の存在は人を惑わす存在として位置付けられている。この怪しい女はやがて単なる火の玉へと零落し存在を忘れられるが、つまりは悪しき行為への「因果」が祟り、その身を落としたと言える。「因果」の一語はこのようにも解釈することが出来るだらう。また、剃刀を片手に現れた美女が前話の髪剃り狐のイメージを引きずるものとすれば、狐たちは前話での行き過ぎた復讐の報いをここで受けたとも考えられる。先ほどの馬方の行為への「因果」に加えて、本話には複数の因果譚が隠されているのではないだろうか。

話を元に戻したい。「狐川」の地名から浮かび上がった「忠度」の語は「ただ乗り」を暗示させるだけの言葉遊びではない。同時にこの名は、一話を『安宅』へと結び付けていくキーワードともなっている。『俳諧類船集』の「卷

物」(巻五)の項には、次のような連想が示されている。

狐川より引返し巻物一つ五条三位へ持参せられしは薩摩守なり。……(中略)……笈の中より往来の巻物を取り出し勸進帳と名づけつつたからかによりみしは弁慶なり。⁽²⁶⁾

薩摩守忠度は「巻物」という共通項を解して、弁慶の勸進帳を想起させるらしい。とすれば、出発地の「呉服」に加えて、この「狐川」の地名もまた、『安宅』からの連想によって導き出されたものではなかったか。

さらに、『類船集』の「六尺」(巻二)の項には、次のような記述が見られる。

屏風 下帯 田舎の畳 擬宝珠 棒 酒桶 大男 弁慶 鐘の緒 禪宗経学 堀 戸

曾子曰可_三以託六尺之孤_一。のり物をかくものを六尺と云事公家かた寺かた医者埋入などに云伝へて大名には只かこのものとこそいへ。

公家では乗物の担ぎ手を「六尺」と言うそうだが、同時に「六尺」の語からは、身の丈が六尺あったという弁慶を導き出すことが出来る。「のり物―六尺―弁慶」との経緯をたどって、やはり連想は『安宅』へと繋がって行くのである。

以上のことをまとめれば、本話は、非常に分かり辛い形ではあるものの、そのエピソードと設定に『安宅』から喚起される連想を多く含んでいる。それは原拠と呼ぶほどに明確なストーリーや表現が踏襲されているわけでもなく、単にイメージの基盤として『安宅』が存在したのではないか、という程度の影響ではある。しかし『安宅』によって喚起されたイメージの糸と、『義残後覚』の伝える怪しい女乗物の伝承を緬い交ぜにすることで、一話を成立させる

要素をある程度埋めることが出来るのである。

おわりに

「十二人の俄坊主」の、一見断絶した話材はなぜ一話にまとめられたのか。その疑問を起点として、『諸国はなし』と謡曲『安宅』との関連を考察してきた。ここまでの結論を踏まえれば、次のような創作の経緯が想像できる。

西鶴は巻一の七「狐四天王」の結末「俄坊主」に触発されて『安宅』を連想した。同時に「弁慶―六尺―のり物」の連想から、もしくは狐のいたずらという点から、狸の怪異譚である『義残後覚』「女房、手の出世に京へ上る事」を想起して、この二つの素材を併せることで巻二の一「姿の飛のり物」を書いた。次に同じく『安宅』を利用し、そこへ紀州藩のエピソードを盛り込むことで巻二の二「十二人の俄坊主」を創作した。つまり巻一の七から巻二の二にかけての三話が連想で繋がっていることが見て取れるかと思う。こうした創作経緯に見られる、素材を多義的に読み換える発想力や、雅の世界を俗へと転じる手法には、やはり俳諧師としての西鶴の手腕が生かされていると言えるだろう。

さて、『西鶴諸国はなし』研究に於いては、各話の配列に西鶴の編集意識を見出そうとする論がこれまでなされてきた。管見の限りでは、連句的な配列や、説話特有の配列が用いられているとの指摘がある²⁰⁾。そのいずれにも共通するのは、連続した話同士が連想によって結ばれているという見解であろう。本稿の結論も、これらの論に符合するものであるかと考える。

また、平林香織氏は、巻二の五「夢路の風車」と巻二の四「残る物とて鍋ひとつ」の連続した二話のいずれにも、謡曲『邯鄲』『松風』が用いられていることを指摘されている²¹⁾。複数話にわたって同一の素材を利用する方法が、

『諸国はなし』において他にも用いられているという点を確認しておきたい。

本稿では、「十二人の俄坊主」「姿の飛のり物」の二話へわたっての『安宅』の影響を考察してきた。最後に付け加えて、これらに後続する巻二の三「水筋のぬけ道」についても触れるならば、同話は北陸の小浜で入水した娘が、東大寺のお水とり用いる閼伽井につながる水脈に乗って、奈良へと流れ着く奇談である。「十二人の俄坊主」の後にこの話を想起させたものは、やはり東大寺の勧進という名目で北陸を旅する『安宅』の存在ではなかっただろうかと考えられるが、この疑問に関しては未だ一話全体を通しての考察が不十分であり、今後さらに検討の機会を持ちたい。

註(1) 有働裕氏「『はなす』ことへの凝視——『西鶴諸国はなし』の『はなし』と『はなし手』——」『愛知教育大学研究報告 人文・社会科学編』四六号（愛知教育大学 一九九七・三）

(2) 野間光辰氏『西鶴新新攷』『西鶴五つの方法』（岩波書店 一九八一・八）

(3) (2)に同じ。

(4) (2)に同じ。

(5) 岸得蔵氏「『西鶴諸国はなし』考——その出生をたずねて——」『仮名草子と西鶴』（成文堂 一九七四・六）

(6) 後小路薫氏「『西鶴諸国はなし』「十二人の俄坊主」の素材」（『文藝論叢』第四一号 大谷大学文藝学会 一九九三・九）

(7) 宗政五十緒氏『井原西鶴集』二（日本古典文学全集39 小学館 一九七三）

(8) (6)に同じ。

(9) 江本裕氏「『西鶴諸国はなし』伝承とのかかわりについて」『伝承文学研究』一七号 一九七五・二二

(10) 乾裕幸「『西鶴』（俳諧と浮世草子）序説」『江戸人物読本 井原西鶴』（市古夏生・藤江峰夫編 ペリカン社 一九八九・一）

(11) 前田金五郎氏『西鶴連句注釈』勉誠出版 二〇〇四・一）

- (12) 『信徳十百韻』『古典俳文学大系3 談林俳諧集一』(集英社 一九七一・九)に拠る。
- (13) 『二葉集』『古典俳文学大系3 談林俳諧集一』(集英社 一九七一・九)に拠る。
- (14) 『安宅』の本文は以下全て『謡曲集2』(新編日本古典文学全集五九 小学館 一九九八・二)に拠った。
- (15) 『西鶴諸国はなし』の本文引用は全て『井原西鶴集2』(新編古典文学全集六七 小学館 一九九六・五)に拠った。
- (16) (6)に同じ。
- (17) 岩崎雅彦氏『凱陣八島』と『出世景清』―能『安宅』の摂取という観点から―(『芸能史研究』芸能史研究会一五〇号 二〇〇〇年七月)
- (18) 井上敏幸氏『西鶴諸国はなし』の素材と方法―巻二ノ一「公事は破らずに勝つ」(『静岡女子大学研究紀要』八号 静岡女子大学 一九七四)
- (19) 本文中では「竜」の怪異と表現されているが、章題は「大蛇も世に有人が見た様」となっている。
- (20) 谷脇理史氏「西鶴作品における典拠の問題(下)―『武道伝来記』を中心に―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要(文学・芸術学)』三十七号 早稲田大学大学院文学研究科 一九九一)
- (21) 『船弁慶』『謡曲集2』(新編日本古典文学全集五九 小学館 一九九八・二)
- (22) 高田衛氏「姿の飛のり物」(大会テーマ「文学として読む」とはどういうことか」へ向けて)『日本文学』二〇〇四・九
- (23) 『犬筑波集』『古典俳文学大系1 貞門俳諧集一』(集英社 一九七〇・十一)に拠る。
- (24) 『忠度』『謡曲集1』(新編日本古典文学全集五八 小学館 一九九七・五)
- (25) 『武道伝来記・西鶴置土産・万の文反古・西鶴名残の友』(新編日本古典文学大系七七 岩波書店 一九八九・四)に拠った。
- (26) 『俳諧類船集』(近世文藝叢刊 第一巻 般庵野間光辰先生華甲記念会 一九七九・十二)に拠る。
- (27) 篠原進氏は『西鶴諸国はなし』の全話が、「連句的配列」、つまりは連想で各話が繋がっているとされる。(『西鶴諸国はなし』の〈ぬけ〉、『日本文学』三八巻一号 一九八九・二)吉原万紀子氏はそれに加えて、作品全体が歌仙の構成をもっているとされた。(『西鶴諸国はなし』に関する一考察―俳諧的な流れを中心に―『常葉国文』一四号 常葉女子短期大学)

『西鶴諸国はなし』と謡曲『安宅』

学国文学会 一九八九)。広嶋進氏は「連想による配列」に加えて、「離れた位置にも共通点をもつ」配列がなされていると指摘され、これが説話特有の配列であると説かれている。(『西鶴諸国はなし』と説話集の方法―『宇治拾遺物語』の影
響―)『近世文芸 研究と評論』七十八号 二〇一〇・六)

(28) 平林香織氏「『西鶴諸国はなし』と謡曲」『日本文芸の潮流』東北大学文学部国文学研究室編 一九九四・二)

(てら けいこ・関西学院大学非常勤講師)